

# 南山義塾の誕生から消滅まで

## —南山義塾、同志社英学校、自由民権運動—

森 永 長壹郎

### はじめに

南山義塾設立までのいきさつを述べ、次に義塾の開校式での新島襄の祝辞を紹介する。彼が義塾の開校式に出席したのはなぜか。義塾の初代社長・伊藤熊夫は民権運動家であり、同志社大学設立運動の発起人でもあった。新島は民権運動にどれほどの関りをもったのか。このようなことを明らかにしたい。

### I. 南山義塾とはどのような学校であったのか。

#### 由来

南山義塾は、1858（安政5）年から1871（明治4）年まで寺子屋として使用されていた棚倉孫神社の松寿院に、1877（明治10）年、西村篤や西川義延ら豪農であり民権運動家が発起人となって盍簪家（こうしんか、かつしんか）塾を開くまで遡る（『田辺町近代誌』 p. 626, 以下『近代誌』とする）。

盍簪塾はもともと京都市内の衣棚通り竹屋町下るにあり、1876（明治9）年の記録によると教員1人、生徒8人で支那学を教えていた京都の儒者・山口正養<sup>せいよう</sup>を伊東熊夫らが田辺に招聘した。これは小学校を卒業後、進んで補習教育を希望する者のための一時しのぎのもので、学科は漢文と歴史であった。この塾は3年ほど続いたが、漢文と歴史だけでは到底時世についていくことはできない。京都府には中学あり、師範学校あり、商業学校があつて、市内の在住者には便利だが、郡部にいては通学は勿論のこと、多大の学資を出して都会の学校に入学することは至難であつ

た。そこで綴喜郡の有志が義塾を興し、都会に行けない者が通学できて、都会の学校の形式学よりは実質学に力を入れるよう努めた。土地の名前をとって南山義塾とした（『田辺町近世近代資料集』 p. 622、以下『近世近代資料集』とする）。

「義塾開業御願」によると、わが国の急務は盛んに教育を施し、人民の智識を開発することである。明治になっても小学校を出たものに対する教育の場がない。京都市内には府立中学、師範学校があるが、綴喜郡とは距離がかなり離れており、親としては子供を遠くの学校に出すのは忍びない。親元で修学させたいと願う者が沢山いるが、ここには教育の場がない。親は修学させたい気持ちがあり、子供は勉強したい志を持ちながら路頭に彷徨い、一生を誤るものがある。そこで「南山義塾ト称スルー社を創立シ、普通中学学科ヲ備ヘ広ク小学年齢外ノ有志子弟即チ欲学而不能学ノ輩ヲ誘導募集シ、盛ニ教育ヲ施シ本郡〔綴喜郡〕人民之智識ヲ開発シ、<sup>すすめ</sup>将テ大ニ国家ノ福利増殖スルヲ図ラント欲ス・・・」（『近代誌』 p. 627、ルビは筆者）という塾開業願いが1881〔明治14〕年、伊東熊夫、喜多川孝経、木村良司の連名で北垣国道京都府知事に提出された。

義塾開設のための資金として、「一株20円の南山義塾株券を400株募集」（同上、p. 628）した。「応募者は187人」（同上）で、407.5株、8150円（同上、p. 629）となった。有力メンバー（西川義延、伊東熊夫、田宮勇）はそれぞれ25株をもっていたが、1株や0.5株、0.25株に投資した人たちが大部分であった。南山義塾の構成員は田辺や精華のみならず、淀、大阪の交野郡の穂谷村、尊延寺村（現在の枚方市）、奈良の北伝馬町にも南山義塾を支える人達がいた（『けいはんな風土記』、p. 162、以下『風土記』とする）。

「明治14年8月16日に、三山木村高木の与二又〔あずけふたまた〕（現三山木垣ノ内）に仮校舎を設け、仮開業」（『近代誌』 p. 629）した。翌年「明治15年4月に高木地内〔現三山木西ノ河原〕に新校舎が落成し、そこに移転」（同上）した。この<sup>あざ</sup>字高木の新校舎があったところは同志社女子大学所有の竹やぶであったが、今では団地になっている。

新校舎は1881年の「南山義塾新築見込案」（同上）によると、「桁行12間・

横5間で建築費750円」(同上)<sup>1)</sup>であった。「社長には伊東熊夫、副社長には喜多川孝経」(同上)が選出された。

学区域は「他郡区・他府県ヨリ入学ヲ請フモノハ何レヲ問ハズ入塾ヲ許可シ・・・当時他郡区、他府県ヨリ入学セルモノ常二十数人ヲ下ラザリキ」(『近世近代資料集』 pp. 622-623) とある。

## Ⅱ. 開校式での新島襄の祝辞

1882(明治15)年4月30日に新島は「南山義塾の開校式」(『新島襄全集』8、p. 236、以下『全集』とする)に出席した。この日新島が述べた祝辞は次のとおりである。

### 祝言稿

予ノ南山義塾ニ忠告〔スル〕ニ非ラス、唯望ム所ヲ陳ス、有志諸君ノ篤志ヨリ此美挙アリ、人才陶冶ノ機会已ニ具備セリト云ヘシ

- 社員ニ望ム所ハ充分維持方ニ注意シ、学校ヲシテ一地位に安着セス、日々月々進歩改良セシムルノ策ナカルベ〔カ〕ラス ○ 教員ヲ選択スルニ注意セザルベカラス
- 教員 教員ノ任ハ殊ニ至重、教員其教方ヲ誤ラハ如何シテ人物ヲ企図スベケン、今ノ教師多クハ人物ヲ養成スルヲ以テ其ノ目的トセス、月給ノ多少ニヨリ其所ヲ移シ月給ヲ貪リ、イササカ己ノ淫欲ヲ逞スル等ノ輩モ陸續輩出スルアレハ、如何シテ生徒ノ品行ヲ端正ナラシメ、有用ノ人物ヲ陶冶シ得ベケンヤ ○ 教員諸君ヨ、教員ノ心得ト為スベキ所ハ、自身生徒ノ率先者トナリ、生徒ノ標準トナリ、生徒ノ志操ヲ高尚ナラシメ、又生徒ノ氣質ニ随ヒ幾分カ教スル所ヲ異ニシ、生徒ヲシテ智進ミ徳高カラシメハ教員ノ任ハ大ニ至レリト云ヘキナリ ○ 体育 ○ 智育 ○ 心育(多クヲ貪ラシメス、克ク克ク味シムベシ、ビーフステッキ) ○ 父兄 社員ノ尽力セルヲ徒為ニ属セシムル勿レ

教員ノ教ヘシノ者ヲ撲滅スル勿レ

吉野ノ例 教員ヲ撰フ唯1人ノ掌握内ニアリ、他人之ニ喋々スルヲ

得ス、撰ヒニ応シタル教員ハ真ノ腐儒者ニシテ当時ノ現況ヲ了知セス、  
洞察セス、古風ノ野蛮流ヲ慕ヒ之ヲ教ヘ、ターフル〔テーブル〕ヲ廢  
シ、ランプヲ廢シ、又随テ自由ノ精神ヲ發達セシムル等ハ更ニ注意セ  
サルヘシ ○他ノ例 同志社ニ來レル1人ノ生徒、父兄ノ誤リニヨリ  
寺僧ノ勸メニ随ヒ、遂ニ學問ヲ廢シタリ

○ 生徒の心得

如斯社員方、教員、父兄其業ノ成ル事ヲ望マルルニ不勉強ニシテ正  
ニ成業セサレハ是レ何レノ過チゾ

藪ノ中ニ満足シテ居レト云ハハ□、

人鶴トナリ飛〔ビ〕揚ラントスルヲ、アブナイ矢張我ハ□

○ 教員タル者己カ雀ノ如キ人物デアリ、生徒ノ中ニ鶴ノ如キ

○ 教員ノ職ハ太政官ニマサル

○ 卑賤ヨリ人物出ス

○ (リンコルン、ガーフィールド) 京都ノ知事

○ 田舎ノ人ニ望ヲ属ス

○ イートンノ話シ

○ 真理ヨリ自由ノ生スルノミ、

○ 人民ノ友トナレ (『全集』1、pp. 423~424)

以上の祝言を簡単な現代語にしてみよう。

私は南山義塾に忠告するものではありません。ただ望むところを述べ  
させていただきます。社会のためになることに進んで協力する気持ちをも  
った有志諸君からこの立派な企てが起こり、人材を陶冶する機会が準備  
されました。

- 社員に望むことは義塾を充分維持していくことに注意し、学校が一  
地位に留まることに安住せず、日々進歩改良する政策がなければなり  
ません。○教員を選ぶに当たっては注意しなければなりません。○教員  
教員の任務は殊に重いものです。教員が教え方を誤ればどうして人物  
を作ることができましようか。今の教師の多くは人物を養成することを  
目的とせず、月給の多い、少ないにより所を変え、月給をむさぼり、己  
の淫欲を思う存分にするなどの

輩が続々と出て来ていますが、どうしたら生徒の品行を正しくし、有用な人物を育て上げる事ができるでしょうか。○教員の皆様方、教員が心得なければならないことは、みずから生徒の先頭に立ち、生徒の手本となり、生徒の志を高くし、また生徒の気性によっていくらか教えるところを変え、生徒の知識が進み、徳を高めれば、教員の任務は大いに至れり尽くせりと言えましょう。○体育 ○智育 ○心育（多くを貪らせず、よくよく味わわせなければならない、ビーフステーキを食べるときのように）○父兄 いたずらに社員の努力にまかせてはいけません。

教員が教えたことを絶やしてはいけません。

吉野の例 教員を選ぶ時、ただ1人で支配権を握り、思いのままにすると害があります。他の人は意見を述べる事ができません。選ばれた教員は本当に腐ったような儒者で、今の状況を知らず、洞察する事もなく、昔の野蛮流を慕い、これを教え、テーブルをやめ、ランプをやめ、したがって自由の精神を発達させる等は全く気にかけていません。○他の例 同志社に來た一人の生徒は父兄の判断ミスにより、僧侶の勧めに従ったばかりに学問をやめてしまいました。

○ 生徒の心得

このように、社員の皆さん、教員、父兄の方々、勉強が出来る事が望まれているのに、勉強せず、学業が成就しないなら、それは誰が過ちを犯したのでしょうか。（藪の中にいて満足しておれと言うと、これは不都合もはなはだしい。人が鶴となって飛び立とうとしているのに、危ないという。やはり自分と同じ）

- 教員たるもの、自分は雀のような人物であるが、生徒の中に鶴のような者もいる。
- 教員の職は太政官にまさる。
- 身分や地位が低く、いやしい者の中から人物が生まれる。
- （リンカーン、ガーフィールド）京都の知事
- 田舎の人に望みをたくす。
- イートンの話

- 真理から自由が生まれる。
- 人民の友となれ。

1882年4月30日付の『日本立憲政党新聞』には、「山城国綴喜郡の有志者が醵金して設立したる南山義塾ハ、愈々本日開業式を行う（後略）」とある。5月3日付の同新聞には「南山義塾の開校式にハ、立憲政党本部より中嶋信行君を首め、・・・西京同志社員新島襄の諸氏臨席し、当日午後2時其典を挙げ、同義塾社長伊東熊夫・副社長喜多川孝経其他幹事・教員各祝詞又は演説等あり・・・一同退散せしは午前1時頃なり」（『近世近代資料集』、p. 621）とある。また「森嶋幸治郎、小嶋義造ら24名の義塾生徒も演説」した（『近代誌』、p. 631）。

南山義塾開校式から1ヵ月半後の1882年6月14日に「東京の和田正幾<sup>まさちか</sup>より南山義塾教員就任を断ってくる」（『全集』8、p. 238）とある。「新島は義塾に教師の紹介を頼まれていた」（『風土記』p. 163）のである。

同年6月8日に「午前、綴喜郡の伊東経夫〔熊夫の誤り〕が来訪する」（『全集』8、p. 237）<sup>2)</sup>とある。この伊東熊夫は同志社大学設立に貢献した人物である。「伊東熊夫・西村七三郎・安本勝治・西堀徳三郎・下妻庄右衛門・竹鼻仙右衛門ら大学設立の発起人になることを承諾する」（『全集』8、p. 272）とある。

伊東熊夫とはどんな人物か。

伊東は1849（嘉永2）年12月10日、旧普賢寺村に伊東喜蔵の長男として生まれた。祖父は藤蔵。家は代々農業を営み、淀藩の庄屋。村の素封家として重きをなした。熊夫は幼い頃、神童と言われた（『田辺町史』p. 842）。漢学を村塾で、蘭学を三山木村の医師木村昇斎に学んだ（同上、p. 486）。

南山城では伊東熊夫や喜多川孝経らが沢辺正脩<sup>せいしゅう</sup>や小笠原長道（のち小室信夫）の影響を受け、自由と民権を語りあっていた。1878（明治11）年盍簪家塾を創立し、1882年、喜多川らと南山義塾を起こし、初代社長となった。1879（明治12）年、京都府会議員となり、初期の府会で

は理論家として活躍した。1890（明治23）年、伊東は第1回衆議院議員に当選した。綴喜郡の茶業組合を指導し、1885（明治18）年4月、山城製茶株式会社を設立、社長となり、緑茶の輸出の道を開いた。1892（明治25）年8月、米国のコロンブス世界博覧会において日本喫茶店を企画し賞賛を博した。俳号を杜甫という。墓所は普賢寺野神にある。（同上、pp. 842-843）

1872（明治5）年、沢辺が田辺小学校に、小笠原は井出小学校に赴任した。小笠原は1875（明治8）年8月迄（就職年月日は不明）田辺に奉職し、学校経営及び国語教授をした。この2人は元宮津藩士で、宮津の天橋義塾の有力メンバーで、自由民権運動家であった。南山義塾の初代の教師に木村栄吉がいる。元宮津藩士、2年間天橋義塾で学び、1878（明治11）年、薪村の小学校に赴任した。その後1881年7月から1882年1月までの7ヵ月間、南山義塾の教員となった。

熊夫の長男は誠太郎で、1871年2月17日、普賢寺に生まれた。水取小学校を卒業後、南山義塾に入り、次いで三山木中学校に学び、1886（明治19）年同志社英学校に入学、英文学を修めた。更に東京専門学校（早稲田大学の前身）に進み、1893（明治26）年政治科を卒業、『田辺町史』p. 845）27歳で京都府会議員に当選した。綴喜郡の電話架設に貢献。普賢寺村の学務委員となり教育功労者として表彰されている。（『近代史』、pp. 961~962）。

### Ⅲ．同志社英学校と南山義塾の比較

#### 由来

南山義塾は小学校を卒業した者や、それに相当する学力のある者に更なる教育を与えるために、都会に行けない者が通学できるようにするために設立された。学ぶ内容は中学レベル、形式学よりも実質学に力を入れた。資金は株券を発行し、8150円を集めた。

同志社の場合、アメリカで教育を受けた新島が、芸術免状（『同志社百年史』資料編Ⅰ、p.6）と神学免状を取得して帰国し、欧米で行われて



いる学術を授ける。資金は新島がラットランドのアメリカン・ボード宣教師の集会（1874年）での演説で、帰国後に学校を設立したいが、微力で設立できそうにないと訴えたときに、集めた5,000ドルである。「因テ学校建築之費用ハ略備レリ」（同上、p. 9）とある。

## 社則の比較

南山義塾では自由主義による人材の育成、人民の智識の開発そして公共の福祉を目指した教育を第1に掲げている（『近世近代資料集』 pp. 610-611）。その根底には自由民権の思想があった。

同志社では社則のことを通則という。智徳並行の教育を行い、徳育はキリスト教の教えを基本としている。

## 入塾規則と教則

南山義塾の場合、満14歳以上、30歳以下の者で、行状端正且つ小学校を卒業又はそれに相当する学力のあるものに入塾資格があり、初めて入塾する者は入塾金50銭を納める。授業料毎月30銭。しかし南山義塾社員（株の持ち主）の子弟については無料。舎費月2円ないし2円50銭。物価の高低に従って定額なし。しかし南山義塾社員の子弟については無料。学業内容は中学および高等普通科のレベルである。学科を5級に分け、各級6ヵ月を持って終了。修学年限は2年半。授業時間は1日5時間、15分の休憩時間。1年を2期に分け1期を8月15日から翌年の2月15日までとする。第2期を、2月15日より8月14日までとする。修身科は『西国立志編』を通して道徳を修め、自助の精神を教え養う。（『近世近代資料集』 p. 593～596）

同志社英学校の場合、13歳以上〔徳富健次郎は10歳で入学〕で国史、略日本外史、十八史略を講読し、普通の文体（片仮名交ヲ云）で記事論説文を書けるものに限る。5ヵ年をもって生徒卒業期限とし、新入生徒の入学を毎年9月上旬とする。1年を3学期に分ける（9月中旬～12月下旬、1月上旬～3月下旬、4月上旬～6月下旬）。授業時間は午前7時半より始まり、正午まで。午後1時より4時まで。生徒は7時35分



の鐘がなると公会に入り、道徳上の話を聞く。毎土曜、日曜日を休日とする。他の学校で教育を受けたものは、英語については先に入学したものと同じ学力を持つものは何時でも入学を許す。入学時に1円（明治15年）を納めること。授業料は通学生も寄宿生も每学期1円50銭（明治13年）、2円50銭（明治15年）、寄宿生は食料として毎月2円50銭（明治13年）、2円75銭（明治15年）を納めること。生徒は飲酒、登楼、喧嘩などは勿論、すべて淫楽がましき場所（芝居、浄瑠璃、義太夫、洋弓場）（明治15年）に立ち入ることを禁ず（『百年史』資料編Ⅰ、p. 253～260）

何れの時代も規則は破るためにあるという。「清滝で飲酒し、自白して2週間の禁足」（『創設期の同志社』p. 297）を食らったものもいるし、「中には退校を命ぜられた者さえいる」（同上、p. 154）。禁煙については「同志社に入る前に習慣にしていたものは2階の階段下でマッチをすり、煙草をふかし、相国寺の藪の中でジツふかしていた（同上、p. 289、）。朝の礼拝のことで市原と吉村は取っ組み合いの喧嘩をし吉村は退校させられた（同上、p. 309）。松平容保の長男・容大は入学前に同志社の規則を破ったため、宣教師たちは彼の入学に反対した。1888（明治21）年3月1日の記録に“Voted to expel (taiko) Matsudaira of 2d year for visiting bad houses.”（2年生の松平は登楼したので退校処分に決定する。）（*Doshisha Faculty Records 1879-1895*, p. 322）とある。容大は大阪で悪友に会い、「新町の青楼」（同上）に寄ったという。本人は新島校長宛に2月29日付けで「自首」（同上）の手紙を出した。同じ日付で、容大の後見人である、会津出身の学生、兼子常五郎と望月興三郎の名で嘆願書が新島宛に出された。容大の犯した罪は「後見人の不行き届きの故であり……いくらでも謹慎させるので、退校だけはさせないで頂きたい」（同上）と言う趣旨であった。4月26日の会議で、「容大を再入学させるかどうかを秋まで延ばす決定がなされ、9月13日になって、ようやく復学が決定」（同上）した。新島のとりなしもあったろう。神学部の兼子常五郎が補育役となった。しかし、容大は1年で退学し、学習院に転校、卒業後、東京専門学校で学んだ。日清戦争には少尉で従軍し、のちに騎兵大尉。子爵で貴族院議員となった。

## 学科

### 南山義塾

史学、文章学、修身科、地理学（地形、人情、風俗）、物理学、博物学、経済学、法律学、作文学、生理学、算術

試験 学業試験は例月試験・定期試験とす。例月試験は毎月末に行いその席順を出し、定期試験は毎学期の終わりに行いその等級を定む（『近世近代』 pp. 597~599）

### 同志社英学校

英語（綴字文法作文）、支那学（本朝史、支那史）、算術、点算、度量学、三角法、地理、天文、窮理学、人身窮理、化学、地質学、万国歴史、文明史、万国公法、文理学、経済学、性理学、修身学（『百年史』資料編Ⅰ, p. 65）

教授法は「啓発自習主義で教師が教えるといふよりも、寧ろ生徒が自ら学ぶ」（『創設期の同志社一卒業生たちの回想録』 p. 4）

全部英語で授業（同上、p.17）

図書館に立憲政党新聞があった。（同上、p. 301）

試験については、カンニングをする者は1人もいなかった。（同上、p. 304）

筆記試験で、時間がなくなり、口頭で答え、満点をもらったものもある。（同上、p. 303）

## 寮則

南山義塾では舎則という。舎監を1人置き、組長を公選する。部屋と体を清潔にしておく。ランプを消して寝る。金銭の貸し借りを禁ず。就寝時間後は発声、音読を禁ず。喧嘩、口論は勿論、飲酒、殴り合い、大声で歌う等、すべて品行、勉学を邪魔することを禁止されたが、飲酒は時と場合によっては許された。毎日午後5時より6時半までを散歩の時間とした。塾のものを破損した時は本人が弁償、本人がわからないときは部屋の費用とする。（『近世近代資料集』 pp. 601 ~ 602）

同志社の場合は塾則という。

春秋の初めに部屋を交代する。各寮とも投票で寮長1名を選ぶ。門限は午後9時半。起床5時半、朝食6時、昼食は正午、夕食5時半。午後9時半に寮長が寮内を巡視するので、9時半より5分以内に自分の部屋に居ること。就寝時間は午後10時、必ず灯を消すこと。再び点灯するを許さず。午後10時より翌午前5時まで校内で声を出したり、騒いだりしてはいけない。室内での音読を禁ず。音読を必要とする者は授業のない教室ですること。教場或いは室内のガラスや障子を破損した場合は修繕費の全額を納めること。生徒は毎日自分の部屋を掃除し、清潔にすること。（『同志社百年史』資料編Ⅰ pp. 255～256）

具体的な例を示そう。

寮長：村井知至、横田安止、山室軍平ら（『創設期の同志社』p. 101）。<sup>3)</sup>

規則に反し、2時まで、都合に依ると夜が明ける迄も勉強し、中には昼は遊んで夜に人が寝静まってから一心に学問した人達もあった（『創設期の同志社』、p. 97）。

部屋を清潔にとあるが、部屋中取散らされて塵一杯で、足の踏み場も無い・・・敷きっぱなしの寝床（同上、p. 73）もあった。

#### Ⅳ. 南山義塾の運命

「明治16、7（1883～1884）年ごろ、生徒数は50余名」（『田辺町史』p. 461）にたっしていた。社会では南山義塾が創立された頃、全国的に自由民権運動が起こる。藩閥政府を倒そうというのである。板垣退助は立志社を設立する。1878年には愛国社ができ全国的な組織となった。1880（明治13）年には国会期成同盟が生まれた。民権運動家たちは県会議員となり、府会議員となって、官僚の専制的な地方行政を打破しようと戦うようになる。京都府会は1879年3月30日に、二条城北旧京都所司代屋敷で開会した。1880年には横村知事が開会中の府会にはかることなく地方税の追徴を布達したことで、府会と衝突した。府会は知事の勝手な取り計らいを攻撃し、議会の権利を守るためにたたかった。綴喜郡出身の府会議員4人（伊東熊夫、横井保親、田宮勇、西川義延）はいずれ

も民権運動家で、この紛争を内務省まで持ち込んだ。政府は横村知事の更迭を余儀なくされた。後任の北垣知事の提出した地方税不足補充法を不当として、田辺村の西川義延らが攻撃し、府下の地方税不納闘争に大きな影響を与えた。広がっていく民権運動は見過ごすことのできない存在となっていった。北垣知事は立憲政党や京都各地の民権家たちのなかには探偵を送り込み運動の切り崩しを図った。南山城の弱点は、南山義塾のリーダーの中に身分意識にとらわれている人たちがいたということである。彼らは南山郷士と名乗っていた。南北朝時代、南山城の武士が後醍醐天皇につき従った。のちに官職を辞し、郷里に帰って農事に従事したという言い伝えがあった。南山郷士と称する人たちは明治になると、はるか昔の働きを認めて「士族の身分にするように」（『風土記』、p. 165）と京都府を通じて政府に要求していた。権力はそこを突いてきた。南山郷士を「平民から士族に」（同上）変えた。南山郷士は士族になり、民権運動は岐路にたたされた。京都には民権派の私塾が3つあった。丹後の天橋義塾、丹波の盈科義塾、南山城の南山義塾である。同志社で「二人目の漢学教師」（『マイナーなればこそ』、p. 162）は若松雅太郎で、後に「亀岡で盈科義塾の塾頭を務めたり、京都府に出仕して、疎水工事や博覧会などの報告書作成に当たったり」（同上、p. 163）した。

北垣知事はあからさまに塾を潰すわけにはいかないので、1884（明治17）年7月3つの塾を中学校に格上げする。地元では中学校ができることを喜んだ。一方、民権派は内部分裂（田宮勇の京都公民会、伊東熊夫の交話会、西川義延の生民会など『風土記』p. 167）を起こしていたため、知事と闘う力ではなかった。1885年2月28日（『田辺町史』p. 461）南山義塾は府に移管され、京都府立三山木中学校と改称され、南山義塾は解消した。南山義塾という名称のもと開校から2年数ヶ月の運命であった。天橋義塾は宮津中学校となり、盈科義塾は亀岡中学校となった。しかし生徒を募集してみると三山木中学の場合、80名の定員であったが、思うように集まらず、開校を延期せざるを得なかった。亀岡中学校も同じく定員未満で募集期間の延期を願い出ている。宮津中学だけが出願者多数のため募集人員の増加を願い出ている。

1886（明治19）年に公布された中学校令により、1府県1中学校の方針により、京都市内の中学校が優先され、三山木中学校は消滅した。

## V. 新島と民権派とのつながり

日本立憲政党政新聞は自由党の近畿地方の機関紙で、古沢滋<sup>うろ</sup>によって創設され、古沢は主筆であった。立憲政党政新聞社の主要幹部の中に、「土倉庄三郎、伊東熊夫」（『新島襄、近代日本の先覚者』p.280）がいた。1881年10月中旬、土倉庄三郎が立憲黨員で編輯長古沢滋と京都に来た。土倉が2人の子（辰二郎、亀三郎）の教育を新島に託したとき、古沢より大学の必要性の話があった。新島が同志社にはその計画があるという話をする、と「土倉氏ハ之ヲ賛成シ是非トモ尽力セン事ヲ約セラレ…五千円ヲ出スヘシ」（『全集1』、pp.175~176）と新島に言ったとある。

新島が板垣退助に初めて会ったのは1882年4月17日である。板垣は4月6日、岐阜で凶漢に襲われた。新島は17日に板垣が彦根より眞宗丸<sup>4)</sup>で「大津にくることを聞き、正午、大津石場の播磨屋まで出迎える。午後3時15分、板垣と大津発の汽車に同乗して京都まで帰る」（『全集』8、p.234）とある。大津での対面は「全く初対面であったのかもしれない」（和田洋一著『新島襄』p.246、以下和田『新島』とする）。4月19日に新島が板垣を見舞ったとき、板垣は大阪で静養中であった。更に、新島は1882年4月21日、「早朝、古沢君を訪ヒ、同志社大学設立ノ主意書を依頼ス」（『全集』5、p.129）とある。同志社大学設立の趣旨を広く理解してもらい、資金を集めるために、新島は新聞の紙面を極力利用しようとして努力した。その結果多数の有力新聞の協力を得ることができたが「最初の協力要請が危険思想を奉じる政党機関紙に向かつてなされたことは興味深い」（和田『新島』p.247）とは和田洋一の意見である。

古沢を訪問した後、新島は「鶏卵若干ヲ求メ、…板垣君ヲ見舞」（『全集』5、p.129）った。板垣を見舞った新島は彼の目の前で「牛乳と卵を混ぜてミルクケーキまがいのもの」（和田『新島』p.246、『全集』8、

p. 235) を勧めると板垣は喜んで飲んだという。そこに小室信夫が来て新島は彼にも会うことができた。小室は自由党の有力メンバーであった。新島は4月25日には丹後の私塾、天橋義塾を訪問し、「9時より12時まで聴講」(『全集』5、p. 139) している。この塾は「自由民権時代の地方政社のひとつ」(同上、p.516) で、「結社人小室信介、社長沢辺正修らの指導で、政治的・教育的活動を展開したが、明治17年に解散」した(同上)。

明治の民権派は、権力によって危険視され、弾圧され、妥協的・・・であったにもかかわらず過激派扱い」(和田『新島』p. 242) をうけていた。そのため「明治後期、大正、昭和初期の同志社人は自分たちの新島先生がそのような危険思想家の群れとかかわりあいをもっていたことを喜ばず、事実をおおい隠そうとする傾向を示した」(同上、p. 242~243)。本井康博氏は同志社創立期のころには、「学生が立志社のメンバーと混同され、当局から危険分子と見なされることもありました。両者は混同され」(『マイナー』、p. 181) やすかったと述べている。兼子常五郎は自由民権運動で逮捕されたが、最終的には無罪の判決を受けた人物である。彼は1891(明治24)年、同志社神学校を卒業した。後に、会津若松教会の牧師になった。会津若松に海老名リンという教育者がいて、幼稚園を設立した。その夫が季昌<sup>すえまさ</sup>という。日新館の秀才であった。警視庁時代は自由民権運動を抑圧した。会津に戻ると市長となったが、会津若松教会で兼子重光(常五郎)より受洗した。

新島が始めて民権派の人物に会ったのは、1878年9月26日(和田『新島』p. 244) であった。同志社に植木枝盛が訪ねて来たときである。「自由党の総理板垣伯幕下の秀才で、・・・クリスチャンであった植木枝盛<sup>5)</sup>などが、官辺に異常な人物として知られておった新島を折々訪問することがあったから、新島屋敷と同志社とは常に警察の目が光っておった」(和田『新島』p. 243)。植木は「自由党の秀才ではあったが、クリスチャンではなかった」(同上、p. 244)。彼は「会衆派の宣教師アッキンソンが同年[1878年]4月高知で伝道説教をしたとき、連日熱心に聴講したということであり、同志社や新島の話は、J. L. アッキンソンの口から聞

いたのか、それ以前から知っていたのか、ともかくもインタレストを感じて京都まで足をのばしたのである」(同上)。1878年4月2日植木は高知伝道のアッキンソンの演説を聞いている(『植木枝盛研究』p. 738)。この年[1878年]、大阪で愛国社再興大会が開かれた。これに参加した植木は「9月25日には山本覚馬を、ついで翌日は同志社を訪ね新島と面談」(『マイナー』、p. 179)している。アッキンソンとの出会いであるが、板垣が彼を高知に招いた。「アッキンソンは1878年5月に村上俊吉(兵庫教会牧師)を伴って土佐へ赴き」(同上)「板垣は、彼らを自分の『立志社』に滞在させて、伝道を支援」(同上)した。アッキンソンは「時には、植木枝盛や栗原亮一といった民権家と並んで演壇にも立った」(同上)こともあった。1880年6月1日には弘前の「東奥義塾塾頭本多庸一が新島を訪ねた。本多はクリスチャンであったが、同時に民権論者としても名を知られていた」(和田『新島』、p. 244)。「同年[1880年]12月には吉田作弥が高知へ出かけている」(同上)。「1881年7月、新島は有馬の二階坊で立志社の古沢滋、竹内綱(吉田茂の父)のふたりと面談」(『マイナー』p. 182、『全集』8、p. 223)した。この時、「新島は卒業生の吉田作弥・・・を土佐伝道に派遣する」(『全集』8、p. 224)ことを約束した。1881年8月5日、植木は宇野昨弥[吉田作弥]らの説教を聞いている(『植木枝盛研究』p. 741)。そして1888年11月16日、植木は同志社に赴き、新島の求めに応じて演説を行った。(『植木枝盛研究』p. 749)。植木の死後2年、1894(明治27)年に植木の蔵書が同志社におくられている(『植木枝盛研究』p. 754)。

立志社からは2人の同志社総長が出ている。第4代の西原清東と第5代の片岡健吉である。

## おわりに

新島が南山義塾に行ったのは大学設立のために初代社長の伊東熊夫の力を借りたかったからではないか。伊東は綴喜郡の素封家であり、国会議員になるほどの実力者であった。新島には同志社英学校を地方に広め



ることも大切であった。

新島は、「自由民権運動に共感を寄せながらも、運動の中には入りこまなかった・・・立派な政治、民主的な政治が行われるためには、政治家の1人ひとりが、キリスト教の信仰をもっていなければならないのが、新島に一貫した強固な信念」(和田『新島』.250)であった。最後に新島の言葉を紹介して結びとする。「我輩ハ敢而政府に抗スルモノにアラス 常ニ国ノ良民タラン事ヲ求ム」。(『全集』 1、p. 454)

## 注

- 1) 1 間は1.8メートル。明治15 (1882) 年東京での標準価格の白米が、10kg82銭、平成 2 年の標準価格10kg2600円。)『風土記』 p. 158
- 2) 筆者は京田辺在住の伊東という名前を電話帳で調べ、往復はがきで、家族の中に「経夫」という名前の人物がいるか、をたずねた。2 人から「いない」という返事があったが、残り 8 名からは返事がなかった。次に伊東熊夫家の墓を見つけ、寺・慶照寺を突き止め、その寺から熊夫の子孫が名古屋に居る事を知らされた。その子孫の方に手紙を出し、返事をいただいた。伊東家には「経夫」という名前のものはいないということであった。
- 3) 寮長：岸本能武太、川本音二郎、山路一三、広瀬孝二郎、広津友吉、山中百<sup>はげむ</sup>、安田保太郎、松浦政泰、安部磯雄、足立通衛、白本(麻生)正蔵、望月興三郎(全集①、pp. 270-271)。
- 4) (貞)(『全集』 8、p. 234) (真)(『全集』 5、p. 128) 崇丸とある。明治15年、北陸真宗門徒の勧誘により97トンの大型船真宗丸が進水(『新修大津市史』第5巻 第3節 p. 342)。朝日新聞には、「板垣退助君を迎ひの為目其前日別仕立にて差立られし琵琶湖通汽船真宗丸<sup>しんそうまる</sup>」(聞蔵Ⅱ『朝日新聞縮刷版1879～1989』1882年4月19日、大阪/朝刊)とルビがふられている。
- 5) 家永三郎著『植木枝盛研究』(岩波書店)には、植木が洗礼を受けたことは出ていない。

## 先行研究

竹内力雄「南山義塾と新島襄」『同志社時報』第51号、1974年、p. 66

鈴木重治「南山義塾遺跡の周辺」『同志社時報』第90号、pp. 144 ~ 145

小枝弘和「同志社と京田辺」、「京田辺と同志社と自由民権運動家」『同志社大学総合情報センター報』No. 31、2006年12月8日発行

## 参考資料

家永三郎著『植木枝盛研究』（岩波書店、昭和35年）

上野直蔵編『同志社百年史 資料編一』（同志社、1979年）

同志社社史資料室編『創設期の同志社—卒業生たちの回想録』（同朋舎、1986年）

村田太平編『京都府田辺町史』（田辺町役場発行、昭和43年）

門脇貞二監修、(財) 関西文化学術研究都市推進機構編集「南山城の自由民権運動」『いはんな風土記』（同朋舎、平成2年）

松井全・児玉佳興子編、北垣宗治監修 *Doshisha Faculty Records 1879-1895*（同志社社史資料室、2004）

本井康博著『マイナーなればこそ 新島襄を語る（九）』（思文閣出版 2012年）

新島襄全集編集委員会編『新島襄全集』全10巻（同朋舎、1983-1996）

高久嶺之介「新島襄と自由民権家の群像—新島と立憲政党の人々—」『新島襄 近代日本の先覚者』（同志社編、晃洋書房 1993年）

田辺町近代誌編纂委員会編『田辺町近代誌』（京都府田辺町発行、昭和62年）

同上『田辺町近世近代資料集』（京都府田辺町発行、昭和62年）

和田洋一著『新島襄』（日本基督教団出版局、1974年）